

木造維摩居士坐像 国宝

維摩居士は、大乘仏教に強い影響を与えた経典である維摩経における中心的な人物である。維摩経は興福寺の根本経典でもあり、興福寺の名前もこの経の中の言葉に由来している。経典には、維摩が出家することなく、最も高い悟りを開く様子や、仏陀のすべての高弟たちを議論において打ち負かしていた様子が記述されている。これには、文殊菩薩も含まれる。文殊菩薩の像は維摩居士の像と並んで展示されている。これらの理由から、維摩居士はアジア全体において仏教徒たちのお手本としての役割を長いあいだにわたって果たしてきた。

仏師の定慶が檜の寄木造りで 1196 年にこの像を制作した。装飾を手がけたのは絵師の幸円である。維摩は病気と老齢に衰えた人物として表現されている。獅子や牡丹の浮き彫りによって装飾された長方形の台座の上に、蓮華座の姿勢で座っている。後ろには、木製の柵に布をかけたように見える衝立が立っている。維摩はやわらかな布の帽子をかぶり、無地の衣の上に飾り帯をかけている。左手は胸の高さで、拳を握りしめており、右手は膝に置き、手のひらは上に向け人差し指と中指を伸ばしたかたちになっている。仏陀や天界の存在ではなく、普通の人間の肖像なので、この像は、鎌倉時代（1185～1333 年）の初期に中国の影響を受けた作品であり、新しい、非常に写実的な仏教彫刻のスタイルの類まれな一例となっている。